

言語論的転回としての文学の読み

丹藤博文

国語教育講座

The Reading of Literary Texts as Linguistic Turn

Hirofumi TANDO

Department of Japanese Education, Aichi University of Education, Kariya 448-8542, Japan

1. 問題の所在—実体か非実体か

須貝千里は、『日本文学』(No639) 2006年9月号において、山元隆春『文学教育基礎論の構築—読者反応を核としたリテラシー実践に向けて—』(溪水社 2005年)をとりあげた。「言葉ひとつ」と題されたこの文章は、その題が示唆するように山元の「テキスト」把握を問題化するものである。須貝は「山元氏が「テキスト」という用語をどのような意味で使っているのかが分からなかった」とし、「『テキスト』という言葉が「書かれたモノ」のこととし、自明のものとしている態度には問題あり、と言わざるをえない。なぜなら、その自明性がテキスト論の「テキスト」が孕んでいる決定的な問題提起性をすりぬけていくことに働いていくからである」と指摘する。須貝は、「テキスト」とはロラン・バルトが「作品」という実体論的見方を否定し還元不可能な複数性として方法化したものを、山元は「実体論の範疇を超えていない」として問題視しているのである。では、「テキスト」を実体化することの何が問題なのかという点、「氏(山元—丹藤注)は、「テキスト」は「物質の断片」を蘇生させ、往き還る場所となり、読みの正解を担保する実体となってしまう。それだけでなく、同時に「読者」という実体も機能させようというのだから、そこにエセ読みのアナーキーという事態が出現することになる。この事態をバルトは「容認可能な複数性」として、徹底的に排した。「テキスト」を完全に実体から切り離さなければ、テキスト論は画期的意味を失ってしまうからである」と断じた。

これに対して、山元は、「失いつづけたすべてのものの打ち上げられる場所」と「行くべきところ」との間で—文学教育の「転回」と「希望」のために—(『日本文学』No650 2007年8月)において、須貝の批判に応じている。山元は「『テキストと読者との相互作用』のなかで立ち現れるものが「作品」であるというイーザーやローゼンブラットの見方を支持し、これに従って論述を進めていもいる」と言う。「読者のなか

に「テキスト」が成り立つことと、その読者にとっての「作品」が生起することとは同時に営まれる」と述べているように、山元の見方では「テキスト」と「作品」とは連続的にとらえられており、本質的な差異はない。そして、アラン・パーヴィスを引用したうえで、「話題との関係で text という語がたくさん用いられている。可算名詞として用いられていることは一目瞭然である。それゆえ、text という語そのものが、一応「実体」をあらわす語として用いられていると把握することは誤りではないと思われる」としている。つまり、山元のテキスト観は実体論的に措定されているという須貝の批判に対して、山元はパーヴィスを根拠にしなげながら、テキストを実体だと答えているのである。

須貝は単に山元の「テキスト=実体」観を批判するためではなく、非実体としてのテキストという問題性に山元も立ちきくことを促しているものと考えられる。もしそうだとすれば、問題はテキストは実体か非実体かという二者択一にあるのではなく、非実体としてのテキストを読むとはどういうことなのかを教育という文脈の中で追求するということになるだろう。後述するが、国語教育においては、教材研究から評価に至るまで言語は依然として実体論であるからである。したがって、読む対象を実体とするのか非実体とするのかは、須貝と山元の見解の相違を超えて、文学の読みの教育にとって看過できない重要な問題であると言ってよいだろう。

両者のテキスト観を手がかりにしつつ、言語論的転回以後の読みの教育を模索することが本研究の目的である。

2. 還元主義批判

言葉は実体として在るのではない。また、言葉は意味を伝達する道具ではなく、言葉が意味を現らしめるといった言語論的転回は、ソシュールやウイトゲンシュタイン以降理論的には自明なこととされていると言えよう。言語論的転回を起源とした批評理論や構造主義といった新たな知見は国語教育にも影響した。読

むべき主題は作品の中に在るという客観主義は説得力を持ち得なくなった。「作者」を読み起源ないしは根拠とし、作品を「作者の意図」の具体化と見なすという図式は、言語論的転回からは出てきようもないからである。「作家」の伝記的事実を参照し「作者の意図」を根拠とする還元主義は批判され、読者との対話や相互作用を可能とする「テキスト」なのだと言われたりした。作者から作品へ、そして読者へと読みの比重はシフトし、教室の読者たる児童・生徒の読みが重視されるようになった。しかし、読者論は恣意的な読みを助長するだけと批判されたり、新学力観が強調され経験主義の復活が企図されたりと、国語教育はめまぐるしく展開していくことになる。しかし、その一方で、教科書では「作者は何を言いたいのでしょう」といった解釈学的図式は温存され、授業においても「教科書のどこに書いてありますか」といったように言葉は実体化されている。具体的に例をあげよう。

「一つだけちょうだい。」という言葉から、この作品は始まります。題名は「一つの花」です。このことから、この「一つ」という言葉に、作者が特別な意味をこめていると考えます」（『こくご 四下 はばたき』光村図書 p.15）[ただし、傍点は丹藤、以下同様]

学習の課題

b 筆者のものの見方や感じ方をとらえよう。
・芭蕉の「旅」への思いがよく表れている部分を抜き出そう。（『新編 新しい国語 3』東京書籍 p.92）

学習のてびき

四 人間が虎になるという虚構をとおして、作者は何を描こうとしたのだろうか。（『現代文 改訂版』教育出版 p.32）

それぞれ小学校・中学校・高等学校の教科書からの引用である。作品の読みの根拠を「作者」や「筆者」に求めようとしていることの端的な証左と言ってもいいだろう。これは、ヒトが言葉を伝達的手段・道具とする見方、すなわちソシユールの用語で言えば「言語名称目録観」にはかならない。つまり、言葉は道具として実体化されていることが明らかなのである。手元にあるいくつかの教科書を例にあげたが、言語実体論は国語教育の論文や実践報告にも、いくらでも指摘することができる。

これ以上の論拠はあげないけれど、国語教育においては言語観は、「展開」はしたけれど「転回」しきれてはいなかった、というのが私の見方である。山元はパーヴィスがテキストを可算名詞として扱っていると

いう理由で、「text という語そのものが、一応「実体」をあらわす語として用いられていると把握することは誤りではない」とするべきではなかったと、とりあえず言っておきたい（「とりあえず」と述べた理由は後に触れる）。山元は「[テキストと読者との相互作用]のなかで立ち現れるものが「作品」であり、イーザーやローゼンブラットの述べ方を支持」していると言う。しかし、それではバルトの提起した問題、すなわち還元不可能な複数性に対応できず、「作品」ではなく「テキスト」という概念装置を言わねばならなかった問題提起性が捨象されてしまう。作品とテキストを峻別しなければならない所以である。「山元氏の側に常識は味方している」と須貝も示唆するように、言葉やテキストを実体化した方が、読みやすいし教えやすいことは自明である。「ここにこう書いてある」「作者はこう言いたかったのだ」といった読みの方が授業しやすいだろう。国語教育研究から教科書・授業にいたるまで、国語科成立100年の歴史は、言語実体観とともにあった。1980年代、構造主義革命・詩的言語の革命と言われ、「作品」は「テキスト」へ、文学研究は文化研究へとシフトしていった。しかし国語教育の言語観は実体論であり、読みは「作者」を中心とする解釈学的図式を出るものではない。疑いもなく、言葉は実体として在るわけではない。音やインクのしみでしかない。この非実体としての言葉・テキストという問題を受け止め、読むという行為をどう考え具体化して行くのかといったことは、読みの教育においても「常識」となっているとは言えないかもしれないが、言葉は実体ではなく、言葉が世界をあらしめ創造しているのであれば、非実体としてのテキストをどう読むかという問題は読みの教育において不可避のはずである。

3. 実体・実体的・非実体

国語教育における言語観は、実体論であることを述べた。しかし、振り返ってみると、言語を実体化するという事態は、何も国語教育に限ったことではない。日常生活においても、われわれは言葉を実体化しがちだからである。暴言・差別語・セクハラ発言などの例を持ち出すまでもなく、実体化の例は日常しばしば経験することである。日常会話から、教室での指示や指導、名言・名句の類にいたるまで、われわれは言語を実体化しがちなのである。文学テキストの読みにおいても、登場人物の心情を探るのに、人物の行動なり物語の出来事なりを実体化して根拠とすることは普通に見られることである。先に、山元の実体論に「とりあえず」という留保をつけたのも、一般に言語の使用において言語を実体化する傾向があるからである。山元がテキストを可算名詞として見たのも故無きことではない。つまり、非実体である言葉やテキストは実体的に取り扱われるからである。いくら言葉はインクの

しみだとしても、一冊の書物という形態をとって受容される場合、その書物は実体である。その際言葉も実体的に受容されてしまう。つまり、言葉もテキストも実体ではないにもかかわらず実体的であると言わねばならない。この実体ではないけれども、かといって非実体ともされず、実体的に理解・表現されてしまうところに、非実体論の陥穽がある。とりわけ、教育は評価を避けることはせず、文法指導やテストの例を持ち出すまでもなく、定期試験から入学試験にいたるまで、実体化は免れないという傾向が強い。テキストを実体ではなく、非実体とみなすという態度をとるとしても、表出するに際しても実体的にならざるをえないために、実体論として受け取られてしまうという事態になる。つまり、言語の実体化傾向をふまえたうえで、実体的との差異に着目しながら、非実体のテキストを読むことの条件なり意味なりを考えねばならないということでもある。非実体のテキストを読むことは、実体的という事態を超えて、どうしたら実体論から免れるかという問題でもあるわけである。山元のテキスト把握の矛盾を指摘したが、このことは山元だけが陥っている難問ではない。「語り」にせよ「構造」にせよ、もともと非実体としての概念なり方法なりであるにもかかわらず、実体化するという傾向はけっして他人事ではない。なかには言語実体論でありながら、「語り」「構造」といった衣装を纏っているために、よけいに混乱してしまう例も見受けられる。私自身の読みにしても実体化から免れているつもりでいながら、他者からは実体的と指摘されることもしばしばである。言語実体論から脱却することは可能なのか。あるいはこの実体・実体的・非実体、それぞれを差異化する方途はあるのか。このことは容易ではない。

そこで、ウイトゲンシュタインの言語批判を参照することにしたい。ウイトゲンシュタインもまたソシュール同様言語論的転回の立役者だからであり、彼の「言語批判」の軌跡は、ある意味で言語実体論と決別するための闘いでもあったからである。

4. 第一の転回から第二の転回へ

リチャード・ローティは言語論的転回を次のように説明している。

最近の哲学におけるいわゆる「言語論的転回」の要点は、われわれはかつてアリストテレスとともに必然性は物に由来すると考え、つづいてカントとともにそれはわれわれの心の構造に由来すると考えたのに対して、今ではそれが言語に由来することを知っているということにあると考えられている。しかも、哲学は必然的なものを追求しなければならないのだから、哲学は言語論的にならないといけない⁽¹⁾。

近代哲学から現代哲学への移行は、「意識」や「観念」の分析から「言語分析」をその方法としたとされる。先鞭をつけたのはゴットロープ・フレーゲであるが、その影響を受けたウイトゲンシュタインもまた「あらゆる哲学は「言語批判」である⁽²⁾とする。ここでは、その「言語批判」を主題化し瞥見することにした。

ウイトゲンシュタインの言語批判は『論理哲学論考』において「像の理論」として定位される。「命題は現実の像である」というものである。つまり、言葉は現実（対象）を名指しする「像」だとする⁽³⁾。「像」だけでは命題が事態を正しく「描写（represent）」しているかどうかを決めることができないため、「像」と「現実」がある種の「形式」を共有していなければならない。それが「論理形式」と言われるものである⁽⁴⁾。そして、言語が現実の「像」である以上、言語の限界が現実、すなわち世界の限界ということになる。しかし、これでは、ある「像」がある「現実」を正しく描写しているのかどうか確かめようがない。「論理形式」は認識の前提とされ、描写の真偽を判定する根拠にはならないということである。ここで前期ウイトゲンシュタインはある難問に突き当たることになる。すなわち「像」と「現実」の描写の真偽を判定できるようにするためには「像」の外部に主観（主体）を想定しなければならない。しかし、言語の限界が世界の限界である以上、そのような超越的な主体を想定することは不可能である。そこで、ウイトゲンシュタインが考えたのは、そのような認識論的主観を言語の内部に取り込むことによって言語の自律性を確保しようとするものである。言語は現実からは自律した「文法」を持つとされる。言語は現実の像として対応関係を持つという考えから現実からは自律する独自の文法によると展開したのである。このことは、本研究の文脈で言えば、「像の理論」段階においては、言語は現実との対応関係にあるという点で言語の意味は実体化されうるが、そのようなソシュール言語学の用語で言えば「言語名称目録観」が明確に否定されたということでもある。つまり、言語はその外にある対象や意味を指示するのではないということである。ソシュールは言語という記号体系はネガティブな差異の体系でしかないとし、対象は言語によって作られるとしたが、同じ考えはこの時期のウイトゲンシュタインにも見いだすことができる。「文法が現実に対して釈明せねばならぬいわれはない。文法の諸規則がはじめて意味を規定（構成）するのであり、したがってそれらはいかなる意味に対しても責任はなく、その限りで恣意的である。」⁽⁵⁾。ソシュールの言う「言語名称目録観」は、ここで明確に否定され、実体論から非実体論への、所謂「言語論的転回」を認めることができる。これを〈第一の転回〉としておく。

ウィトゲンシュタインは、ソシュール同様、現実があつて言語があるといった言語観を文字通り転回してみせた。意味の源泉としての言語外の事実は破棄され、言語の内部にとどまることが要請されたのである。しかし、意味の実体化を避けて意味の基盤を言語の内部に求めるように仕向けたとしても、それで言語の非実体化が果たされたわけではない。この点は強調されてよいだろう。つまり、言語と現実との対応関係を切断し、現実があつて言語があるという従属関係を逆転させ、言語の内部に意味の基盤を置いたとしても、それでもなおわれわれは意味を実体化しがちなのである。しかし、ウィトゲンシュタインは言語による幻惑・変装といったことから思考を回復することが哲学であると考える以上、言語の実体化は破棄されなければならない。「語の意味という一般概念が言語の働きを煙霧の中にとりこめ、それを明瞭に見るのを妨げ」⁶⁾ているというが、ウィトゲンシュタインに一貫した認識であり、それゆえ、「煙霧」をとりはらうことが彼の「言語批判」の主要なテーマなのである。つまり、哲学するうえで、ウィトゲンシュタインにとっては、〈第一の転回〉では不十分であったということである。このように言語論的転回のさらなる転回を追究したところにウィトゲンシュタインの独自の領域がある。

それでは、言語の内部に意味の基盤を置いたとしてもなお、現実に意味の基盤を求める（言語を実体化する）というわれわれに根強い言語観から脱却するために、ウィトゲンシュタインはどうしたのか。それは、言語の「外部」と「内部」といった区別を無化するという方法である。それが「言語ゲーム」にほかならない。いわゆる前期の「言語対象」説から「言語使用」説への移行である。ウィトゲンシュタインは、「言語ゲーム」を次のように記述する。すなわち、「言語ゲームとは、子どもが語を使用し始める際にとる言語形態のことである。言語ゲームの研究は、言語の原初的な形態の、すなわち原初的な言語の研究である」⁷⁾。また、「私はまた言語とそれが織り込まれる諸活動の総体も「言語ゲーム」と名づける」⁸⁾。これ以上の規定をウィトゲンシュタインはしていないが、ウィトゲンシュタインの研究者として知られる永井均は「言語が話される場面や条件や脈絡のすべてをそこに含み込んだもの」⁹⁾と説明している。ここで肝心なことは、ウィトゲンシュタインは、「ゲーム」なる比喻を用いて言おうとしたことは何か、ということである。思うに、ウィトゲンシュタインが企図したことは「ゲーム」というアナロジーを持ち出すことで、言語の意味には根拠などなく、「ゲーム」のようにそれ自体としてしか成立しないという見方を提示したのである。だからこそ、言語の「心象説」は否定されなければならないし、根拠ではなく「使用」こそが言語の見方としての射

ているということになる。言語は意味という根拠を持たないということを示すのに「ゲーム（ドイツ語では「spiel」=遊び）という比喻は卓抜であったと言うべきである。「言語ゲーム」は、われわれの生活や文脈から遠ざかっていくように思われるかもしれない。しかし、そうではない。むしろ逆で、言語の使用に目を向けることで、既成の意味を宙ぶらりんの状態にし、言語の多様で複雑な働きを浮上させるように仕組まれている。意味があるから使用するのではなく、使用されるから意味がある。ここに、言語論的転回のさらなる転回、すなわち〈第二の転回〉を見ることができる。本研究の文脈で言えば、非実体としてのゲームとしてとらえることで、実体的もふくめた実体論から完全に自由になることを目論んだと言えよう。

5. 「第三の言語観」

これまで述べてきたように、ウィトゲンシュタインの哲学の軌跡は言語論的転回であり、それはまさしく言語実体論批判にほかならない。ソシュールが言語学者として言語のありようを記述しようとしたのに対して、ウィトゲンシュタインにとっては言語は哲学する（考える）ためにある。ウィトゲンシュタインが示唆するのは、われわれがものごとを認識したり考察したりするとき、言語実体論から解放され非実体論に立たなければならないということである。野家啓一は「言語に関する全体論がもたらしかねないこうした言語体系の実体化を否定するために、ウィトゲンシュタインは「ゲームとしての言語」という考えに導かれて行った」¹⁰⁾とし、次のように述べている。

その後のウィトゲンシュタインの思索は、このそれ自体で完全な言語としての「言語ゲーム」の考察へと収斂して行くことになる。おそらく「中期」から「後期」への歩みは、この「言語体系」から「言語ゲーム」へのゆるやかなカーブとして描き出すことができる。そこでは「要素論」でも「全体論」でもない第三の言語観が徐々に熟成して行くことになるのである¹¹⁾。

ウィトゲンシュタインは言語論的転回のさらなる転回を求めた。そのことを野家は「第三の言語観」としているのである。以下そのことについて述べたい。

ウィトゲンシュタインの哲学的軌跡は、いかにわれわれが言語実体論から抜け出すことが困難かということ逆を逆にして物語るのもいよう。先にも触れたように、言語実体論は日常生活から教育的な活動全体まで覆い尽くしている。また、実体的であることから免れない場合もある。しかし、そうであればこそ、言語の教育の中のどこかに言語非実体論による言語活動を見いださねばならないのではないか。それは、今のところ文学

と言われるテキストにおいて可能なのだと考える。とすれば、われわれが読む対象は実体的な作品ではなくて、非実体としてのテキストという立場に立ちきるのでなければならない。というより、むしろ文学的なテキストを読むことは、読む対象を非実体化していく行為なのである。「文学」的なテキストにおいては、はじめから「フィクション」として指示対象からは解放され意味の実体化から免れているからである。これまで、テキストの構造化・空間化、メタレベルを読む、語り手の物語内容や登場人物への批評を読むといった教材研究のレベルではいくつかの試みをしてきた。テキストを実体概念から関係概念へと移行させたいうえで、読みを認識や思考のためのレッスンとするためには言語・テキストの非実体化こそ読みの喫緊の課題だと考えている。

しかし、ワイトゲンシュタインの言語論が示唆するように、そのような非実体化、つまり〈第一の転回〉だけでは、実は済まないことを看過するわけにはいかない。別の言い方をすれば、80年代以降の「テキスト論」をさらに転回させなければならないということである。なぜなら、テキスト論はシニフィアンシニフィアンの浮遊性のみを強調し、本文という概念を棄ててしまうため、「多様な読み」「恣意的な読み」を超えることはできないからである。したがって、いったんは非実体としてのテキストに立ったうえで、そこから〈第二の転回〉を模索するという道筋が必要となってくる。野家の言う「第三の言語観」が求められなければならない所以である。今日、〈第一の転回〉の具体化を果たし、〈第二の転回〉へ向かうことは言葉の教育の主要なテーマになると考えている。

注

- (1) リチャード・ローティ『哲学の脱構築』（室井尚他訳 御茶の水書房 1985年7月 p.118）
- (2) ウイトゲンシュタイン『論理哲学論考』（野矢茂樹訳 岩波文庫 2003年8月 p.40）
- (3) 「記号言語は、それが表すものに対して、ふつうの意味でも像になっていることが知られよう」[4-011]（前掲書、p.41）
- (4) 「およそ言語が現実を一正しいにせよ誤っているにせよ一写しとることができるために、いかなる形式の像であれ、現実と共有していなければならないもの、それが論理形式、すなわち、現実の形式である」[2-18]（前掲書、p.21）
- (5) 『ワイトゲンシュタイン全集3 哲学的文法』（大修館書店 1875年10月 p.256）
- (6) 『ワイトゲンシュタイン全集 8 哲学探究』（藤本隆志訳 大修館書店 1975年9月 p.45）
- (7) 『ワイトゲンシュタイン全集 6 青色本』（大森荘蔵訳 大修館書店 1976年7月 p.18）
- (8) (6)に同じ。p.20
- (9) 永井均『ワイトゲンシュタイン入門』（ちくま新書 1995年1月 p.146）。また、アンソニー・ケニーは、「ゲーム」という概念を用いることについて次のように述べている。「われわれの見いだすのは、互いに重なり合ったり、交差し合ったりしている類似性と連関性の複雑な網目なのである。「ゲーム」という概念は、ちょうど一本の糸をつむぐのに繊維と繊維を撚り合わせていくように、伸張されていくのである。」『ワイトゲンシュタイン』（野本和幸訳 法政大学出版局 1982年1月 p.124）
- (10) 野家啓一「ワイトゲンシュタインの衝撃」（『岩波講座現代思想4 言語論的転回』岩波書店 1993年 p.166）
- (11) 前掲書、p.167

付 記

本論は、第116回全国大学国語教育学会〔2009年5月31日（日） 秋田大学〕において、自由研究発表として口頭発表した内容にもとづいている。

(2009年9月17日受理)